

第11講 日常生活

読解演習

解答

- 問一 (1) ① 家族がそろって (2) 私は家族の
 問二 ウ
 問三 私・父・母・弟
 問四 ア
 問五 イ
 問六 エ→ア→ウ→イ
 問七 ウ

解説

問一 (1) 「険しい顔」は厳しい顔。承諾したい事態に直面して、きつい表情になったのである。「仕事」なのだからと、家を空けることが許可された形の「私」は「家族の大晦日から逃げ出して、自由を手にした」と捉えているので、父はその年も例年のように「家族の大晦日」を過ごしたいと思っていたとわかる。それを覆す事態が発生したので「険しい顔」になったのである。

(2) 「家族の大晦日から逃げ出して、自由を手にした」は解放感の表現。解放感は束縛から解放されたとき感じるものなので、この文は筆者がそれまで「家族の大晦日」を過ごすことに窮屈さを感じていたことを示すものとなる。

問二 「入れ歯」は若さのイメージにはつながらない。しかも「入れ歯をはずして」「口が内側に落ち窪^{くぼ}んでいる」とあるので、老いのイメージが強く、アではない。「痩せている父の体は、曲げたらペキー」と折れそうに見えた」も、丈夫そうでない様子なので、答えはウ。「人間味に欠けている」という性格や、「不機嫌」という心情につながる情報が読み取れないので、イとエは除外できる。

問三 「私」の家族構成をつかむ。本文の最初の場面で「間もなく、弟も」「大晦日を家で過ごすのは、父と母だけになった」とあることから、「私」「弟」「父」「母」の四人であるとわかる。

問四 「久しぶりに実家に帰っ」てきた「私」が木を見上げる父に声をかけたとき、「まぶしそうな顔」をし、「居間のソファに四人がそろう」と「満面の笑み」を浮かべ、「みんな夕ごはんを食べよう」と言って「いそいそ」している父は、娘が来て家族がそろったのをうれしがっていることがわかる。「泊まっていきなさい」と言ったのも、浮き浮きする父の様子を描いた流れに連なる部分であるため、同様の心情として捉えるのが自然である。

問五 問五で見たとおり、父は、家族がそろうのをうれしく思う人物である。それは「支配」したいためではない。そろってなごやかにごはんを食べたいだけなのである。ア・ウ・エの状況は本文にないのいずれも除外できる。

問六 イ以外は父が元気なときのできごとなので、最も新しいのはイである。ウは倒れた日のことなので、イよりは前。エは「最後のだんらん」、アは「最後のだんらん」の「五日後」なので、エが最も古いことになる。

問七 「また会える」という会話が最後になったことで「私」は、会ってやれなかったことを悔やみ、二度と会えないことを深く悲しんでいる。合うのはウ。木の世話については出てこないのがアは除外。家族を細やかに愛せる可能性や、父との隔たりも読み取れないのでイとエも除外できる。